
夢のむこうに。

志眞子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢のむこうに。

【Nコード】

N3032F

【作者名】

志眞子

【あらすじ】

高校生のイチと夏夜。幸せな未来を夢みていた二人の日常はある日を境に崩れ始める。だんだんと色を失ってゆく世界で、夢みたものは…。生きることや、人を大切に思うこととは？

モノクロームの世界で

「眠れないの？」

「うん 眠るの苦手になった そのまま…闇に囚われそうで怖い」

「…大丈夫 手 握っててあげる 一人にしないよ」

煙突から煙があがるのを、ただ、眺めていた。

太陽が傾きはじめ、風の冷たさが秋の終りを告げている。
闇が広がりはじめ、一つの小さな星だけが光っている。

もうすぐ冬がくるよ。イチ、見てる？

空に向かって問いかける。返事はかえってこない。

「夏夜さん」

呼ばれて振り返ると、そこには喪服を着たイチの母、二美さんが立っていた。

「今日はありがとね 今日だけじゃないわね いままでありがと」
「いいえ…私はなにも」

二美さんは悲しそうに静かに微笑んでいる。

「今日 まだ時間あるかしら？よかったらイチの部屋…見ていってあげて？遺品…何かあれば持っていってあげて」

フツと二美さんが笑う。

軽く頭を下げ、二美さんの足元をぼんやりと見た。

火葬場からイチの家まで車で四十分。イチのお父さんが運転する車に乗りながら、後部座席でただぼんやりと空を眺めていた。まだ五時前なのに空はもう暗い。

本当に、もう、秋は終わったんだ…

目を伏せる。眠りたいわけではない。けれど、車内では誰も話さない。私も、二美さんも、おじさんも。誰もが言葉を忘れたように押し黙っている。四〇分の時間がやけに長く感じる。いや。長いのか、短いのか、時間の間隔がよく分からない。黙っていたいわけではないが、何を話せばいいのか分からない。

今まで、人とどう話していたのだろうか？

どうやってコミュニケーションをとっていたのだろうか？

四〇分という時間を、私はどうやって過ごしていたのだろうか？

窓から見える景色は、太陽が沈んだせいか、色がない。家もビルも、全てが暗い。

世界はこんなにも色がなかったのだろうか？
今、わたしの目に映る景色は、前からこんな色をしていたのだろうか？

すべてがモノクロームの世界。すべては黒と白と灰色でできている。時折、明るさを求める街のネオンが目に入る。

眩しくなって、また、目を閉じる。

「夕ご飯できたら呼ぶわね　それまで好きに部屋　見ていて」

「はい　ありがとうございます」

二美さんはそう言うときッチンへ入って行った。おじさんは奥の部屋へ先に行ってしまった。私は階段を上がって、二階のイチの部屋へ向かった。久しぶりのイチの家。何も変わらない。イチがいないこと以外。

そう…何も。悲しいほどに。

扉を開けると、やはり何も変わらないイチの部屋があった。

机も、テレビも、オーディオも、本棚も、ベッドも。すべては変わらずにそこにある。

机の上に無造作に置かれた数学の教科書、床に積まれたままの週刊雑誌、脱いだままのジーンズ、そして、ベッドの枕元に置かれた写真たて。

ベッドに座り、写真を手に取る。そこには無邪気に笑うイチと私がいた。

何も知らずに、春の暖かな太陽の下で、幸せそうに笑っている。それほど前のことではないのに、もう、ずっと昔のことに思える。

「イチ…」

世界は艶やかに。

セミの鳴く声がきこえる7月、わたしとイチは高校二年生で同じクラス隣の席だった猛暑が予想される夏を目前に控え、長い休みを前に、そわそわしながらみんな、授業を受けていた。来週から期末テストが始まる。

「…つまり この公式をあてはめるわけだ わかるか？ 次の問題を… 鷺沼 ? 鷺沼君？」

「…あのーえつと…先生 鷺沼くん 寝てます」

先生が何度呼んでも、イチは起きなかった。

「またか ったく しょうがないやつだなー来週から試験期間だったのに」

先生がイチを起こしにこようとした瞬間、授業の終了を告げるチャイムが鳴った。

「ったく しょうがないな 白木 おまえから後で注意しといてくれ では授業はこれまで 今日特に連絡事項はないから ホームルームもないそうだ 気をつけて帰れよ」

先生が教室を出たあと、次々とみんな帰って行った。

「鷺沼くん 鷺沼くん」

イチは全く起きる気配がない。この蒸し暑い中、よくこんなにもすやすやと気持ち良さそうに眠れるものだな、と変に感心してしまった。

「あれー？ 夏夜帰んないの？」

「うん もうちょつと残つてくー先帰つてて」

誰もいなくなった教室で、私は一人、持っていた雑誌を読んだり、英語の課題を解いたりしながら時間を潰していた。

放課後の教室、グラウンドからは野球部が練習しているのか、金属

バットの音がきこえる。

風が少し出てきたのか、窓のカーテンが揺れる。

ブラスバンドの練習音が、風にのって、微かに流れてくる。

この二年棟には誰もいないのか、私が雑誌をめくる音が、やけに大きくきこえる。

「……らき？」

「ん？あ。おきたー？」

ようやく、イチが寝ぼけながら目を覚ました。

「え？なに？え？どうして？」

起きたのはいいが、まだ状況がはつきりと飲み込めていないようで、誰もいなくなった教室を見回しながら、一人で焦っていた。

太陽は傾き、オレンジ色に教室を染め始めている。

ブラスバンドの音はきこえなくなっていた。

「もう放課後だよ　鷺沼くん寝すぎ。どんだけ起こしても起きないんだもん」

フツとわたしが笑う。

私の説明を聞いて、ようやく状況を理解したようだ。

野球部のグラウンド整備の音が聞こえる。

「あーそっか　ごめん　待っててくれたん？先帰ってよかったのに」
照れて笑いながら、しかし、申し訳なさそうに頭をかきながらイチはわたしを見た。

私は読んでいた雑誌と英語の教科書をカバンにしまった。

「んーでもさ　起きたとき一人じゃさみしいでしょ？あと先生が注意しとけてさ」

笑いながら席を立った。

「じゃ、また明日ねーばいばい。」

「…あ！待って白木！」

教室を出ようとした瞬間、いきなりイチが立ちあがって叫んだ。

「一緒に帰ろう 送ってく」

思えば、これが始まり。

照れて頭をかくイチの顔は窓からさす西日がきつくて見えなかった。
オレンジ色の夕日が、わたしの顔を照らしていた。

「え？」

「だから、俺と付き合いませんか？」

銀杏が黄金色に、紅葉は赤く色づいた秋の公園、空はどこまでも高く、青く澄んでいた。

「…はい。」

わたしの顔も赤く色づきながら、二人で顔を見合せて笑った。

秋　初めて手を繋ぎながら、学校からの帰り道、照れくさくて、
何度も顔を見合せてうれしくて笑いあった。

「安物だけど　そのうちちゃんとしたのあげるから」

「ありがとう　大事にする」

クリスマスには指輪をもらった。

街のイルミネーションは赤や黄色やピンク、青に緑。キラキラして、
とてもキレイで。

幻想的な夢の世界。

その中をイチに貰った指輪をはめて、手を繋いで歩けることを、すごく幸せに感じた。

冷たい手をイチが握って、温めてくれる。

白い息をはきながら、二人で並んで座る。満天の星空。

冬　初めてのキス。ぎこちなかったけど、これ以上ないくらい幸せだった。この幸せが続くことを、星に願った。

春空に笑い、夏空に泣いて。

「クラス、離れちゃったね 残念。」

「まあ 隣やからいーやん」

ピンクに色づいた桜は、今が見ごろと言わんばかりに満開に咲き誇っている。

学校へ続く坂道は見事な桜並木。

自転車を押しながら歩くイチの隣。

これからもずっと、イチの隣にいられると思っていた。ずっと一緒。根拠はなく、無邪気に信じて疑わなかった。

「そういえば イチ 進路 どうするの？決めた？」

私たちの通っている高校は、県内で二番目くらいに進学率のいい学校だった。

当然、多くの生徒は高二の夏ごろまでに進路を決めていた。わたしも家から一番近い国立大学の文学部を第一志望に決めていた。

イチはというと、二年進学時の文理選択で、数学が嫌いだから、という理由で文系クラスを選択していた。

「あー…うん。」

素っ気なく返事をするイチ。そっぽを向いて、頭をかいている。

「え？なに？どこ？気になる！」

「なーいしよっ」

「なにそれ！教えてくれてもいーじゃん」

「…」

一瞬口を開き、何かを言いかけた。が、すぐに口を閉じてしまった。

「また今度、教えるから。」

そう言っつて、わたしの頭を軽くたたいた後、イチはもう進路の話に触れなかった。

わたしは内心、面白くなかったが、一週間後、このときのイチの態度の意味を知った。

「悪いな 白木 このプリント朝のホームルームで配ってくれ」

「はい これ何ですか？アンケート調査？」

朝の職員室。今日は日直で教室の鍵を開けなければいけないから、いつもより三〇分も早く家を出た。

職員室には、わたしのクラスの担任はまだ姿がなく、数人の先生がコーヒーを飲んでいた。

「そついや白木 よかったな 鷺沼の進路決まって 先生も安心したよ」

わたしとイチは、とくに隠れて付き合っていたわけではないので、だいたいの生徒が付き合っていることを知っていたし、先生たちもわたしたちの関係を知っていた。

「はい ありがとうございます」

本当はまだ知らないけど、なんとなく知らないとは言いたくなかったから、先生に話を合わせた。

キーボックスから教室の鍵を取り、閉めた。

「あいつはやればできるのに 本当にやる気がないからな 困ったやつだ」

イチは普通に賢い。というか要領がいい。寝ていてもなぜかテストは解けている。

「しかし あいつが教師になりたいとはな あんな授業中寝てばかりのやつが ま よかったな がんばって二人で受かるといいな そしたら来年の春からも一緒にいられるしな」

そう言っつて、先生は空になったコーヒーを注ぎに行ってしまった。

わたしはすぐに職員室を出た。そして教室の鍵を開け、げた箱へ向かった。

ぽつぽつと生徒が登校してくる。イチはいつも遅刻ぎりぎりに登校してくるが、今日はわたしが日直だから、いつもよりは早く来てくれるはずだ。

五分、待つか待たないかぐらいに自転車に乗りながら眠そうに登校してくるイチの姿が見えた。

わたしはげた箱で靴を履きかえ、自転車置き場へと向かった。

「イチ！」

自転車の鍵をかけながら、いきなり呼ばれたイチは驚いてわたしを見た。

「なに？どうしたん？おはよー」

驚きながら、しかし、声の主がわたしだと気づいて笑顔でこちらを見た。

イチは笑うと小さなこどもみたい。わたしはこの笑顔が何よりも好きだった。

「ふふ 青島先生から聞いちゃったーイチの進路。」

わたしはいたずらっ子のように笑いながら、後ろで手を組みながらイチに近づいた。

「そんなにわたしと一緒にいたかったのー鷺沼くん」

イチは一瞬目を大きく開けたかと思うと、小さな声でやられた、とつぶやき、手で顔を覆った。

「まじ 青センのやつ…勘弁してくれよなー」

頭をかきながら、わたしを見て、イチは恥ずかしそうだった。わたしはそんなイチがかわいくて、おもしろくて、嬉しくて、笑った。

その日の帰り、日誌を書き終わるのをイチは一緒に待っていてくれた。

日誌を提出して、いつものように並んで帰る。

夕暮れの桜並木の道には、他の生徒はなく、わたし達二人の貸し切り状態だった。

春　　二人で笑い合う未来を願った。来年の今頃も手をつないで、桜の下を歩けるように。

高校三年生は忙しい。進路希望提出のための個人面談、それが終わったかと思うとすぐに体育祭の準備だ。わたしはクラブに所属していなかったが、イチはサッカー部に所属していたため、高校最後の大会に向けての練習もあった。そして、休日は補講と模試がある。

「なかなか遊びに行けないね」

その日は嫌なほど暑く、キレイな青空と白い大きな入道雲が、青と白のコントラストを描いていた。

わたしがもらした一言は、イチを困らせた。

サッカーの大会を間近に控え、練習も追い込みに入っている。

別にイチを責めるつもりで言ったわけではなかった。

しかし、受験勉強と部活をしなければならぬこの状況で、精神的ストレスのたまっていたイチには、わたしの一言は無責任すぎた。

「しかたないやん　わがまま言うなって」

「別にわがままで言ったわけじゃないよ！たんに思ったこと言っただけ」

イチに言い方に少しムツとしたわたしは、つい口調が強くなってしまった。

それがさらに、イチをイラつかせる原因になった。

『一度くらいケンカはしておいた方がいい。長く付き合いたいのなら。』

そんな言葉を聞いたことがある。しかし、やはりケンカに楽しいことなど一つもない。

この些細なきっかけで始まったケンカとも言えないような言い合いは、この後二週間ほど“口をきかない”という形で続いた。

今思うと、本当にくだらないことが、あの頃はすごく大きなことになった。思った。

それが大人になった、ということなのかもしれないけれど、あの時の純粋な自分を、少しうらやましく思う。

ケンカ中にイチの試合は行われた。

真夏の炎天下。すっきりと晴れ渡った青空から、太陽は容赦なく、選手を照らした。

向日葵が空を見上げる。

イチに気づかれないようにこっそりと、わたしは応援していた。向日葵が太陽を追いかけるように。

夏　はじめてのケンカ。隣に君がいることは特別なことなんだと認識した。

秋風に揺れるコスモス。

「先月の模試の結果返却された？どうだった？」

最後の夏休みが終わり、文化祭も体育祭も終わった10月半ば。

校内は受験モード一色だった。

毎週のようにテストや模擬試験が行われ、センター試験対策講座も始まった。

不確かな未来ほど不安なものはない。

半年後の自分のいる場所がわからない。

自分の進むべき道が正しいのか、

間違っているのかすらわからない。

混沌とした思いを抱えながら、私たちは進まなければならない。

「B判定 英語が下がった 夏夜は？」

「ギリギリCに入ったところ…今回ちょっと自信あったのに」

黄金色に色づいた銀杏並木を眺めながら、どんよりと曇った空を見上げ、溜息をついた。

「いやな雲。」

まるで今の自分を表わしているかのような天気。
ますます気分が落ち込んでいく。

「イチは頭良くていいなー」

ポツリと呟いて、俯く。

まだ2か月ある。

しかし、気ばかりが焦ってどうしようもならない。

イチを責めたいわけではないのに。
イチと同じ大学に行きたいだけなのに。
表情も自然と暗くなっていく。

そんなとき、いつもイチは前向きに励ましてくれる。

「あとちよっと一緒にがんばろ」

そう言っで、頭をなでて、笑ってくれる。

自分だっで、同じ立場で大変なのに。

「息抜きにいいとこ連れてっでやるよ」

いつもの帰り道からそれで、イチが連れてきてくれた場所は、一面、花で埋め尽くされた川原だった。

「キレーー！！何これ！！コスモス？！すごい！！満開！！」

薄いピンクに、濃いピンク、白。

見渡す限り、コスモス畑が広がっている。

「だろ？この間偶然通っで見つけた 絶対喜ぶと思っでさ」

笑っイチを見て、泣きそうになった。

自分のことだっばいいっばいな自分。

相手を思いやる余裕が持てない。

イチはこんなにも私のことを思っでくれるのに。

「ありがとう 元気出た！！」

泣きそうになるのをこらえて、精一杯笑った。

雲間から、一筋の光がさしている。
秋風にコスモスが揺れる。

秋　　強くて優しい人になりたいと思った。　あなたのように。何
があってもめげないように。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3032f/>

夢のむこうに。

2010年10月28日08時29分発行